



国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース

2026年10月28日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2026年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2026年11月～2027年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、11月と2・3月に「平均的な位置（屋久島南付近での変動）」もしくは「離岸傾向」となるが、12・1月は「平均的な位置」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「やや高め」～「かなり高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

漁況（来遊水準）

- (1) マアジ：東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を下回り、沿岸域は前年・平年を下回る。
日本海は前年・平年並み。
- (2) マサバ：東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を上回り、沿岸域は前年・平年並み。
日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (3) ゴマサバ：東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を下回り、沿岸域は前年・平年を下回る。
- (4) マイワシ：東シナ海は前年並みで、平年を上回る。日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ：東シナ海は前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：東シナ海は前年・平年を下回る。

※「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：漁況：浮魚資源部（長崎） 黒田、高橋

海況：海洋環境部（長崎） 西内、種子田、和川

電話：095-860-1600（長崎）、ファックス：095-850-7677（長崎）

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

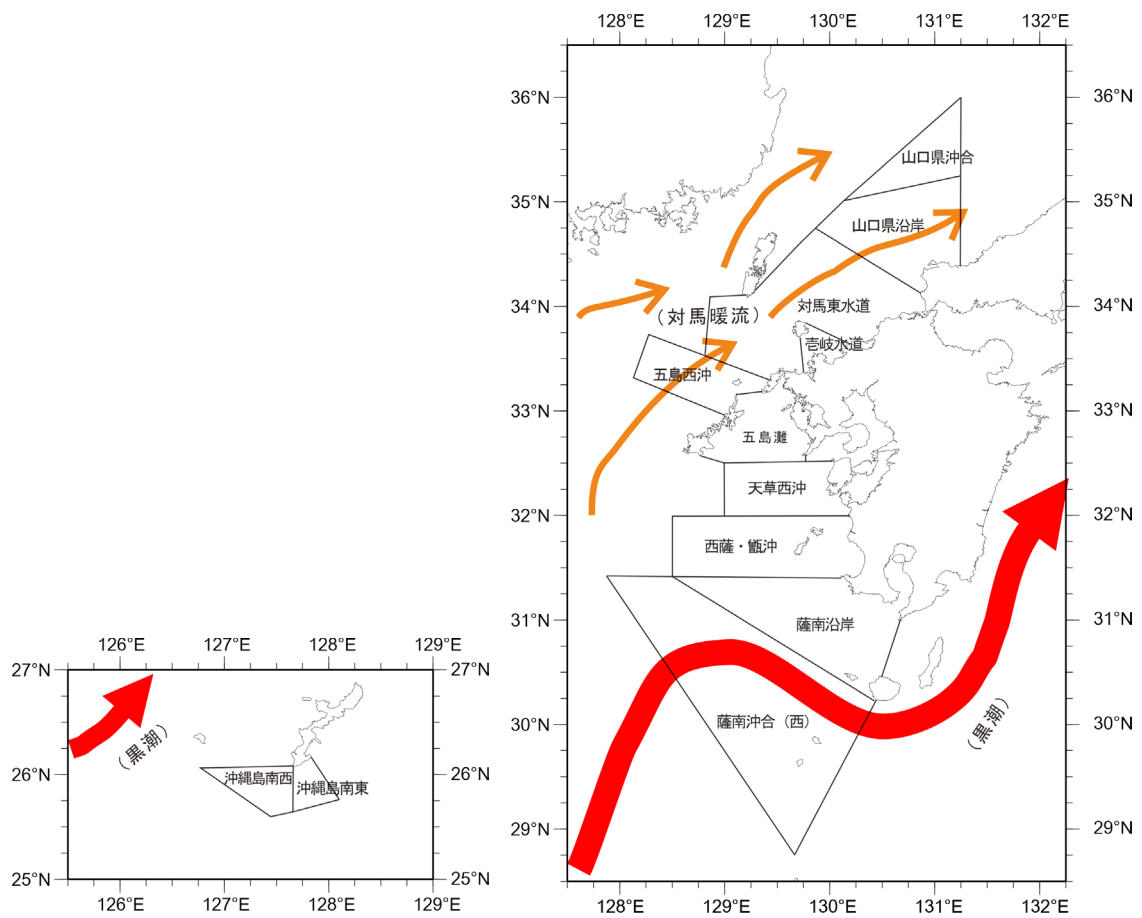


図1. 海況（沿岸）

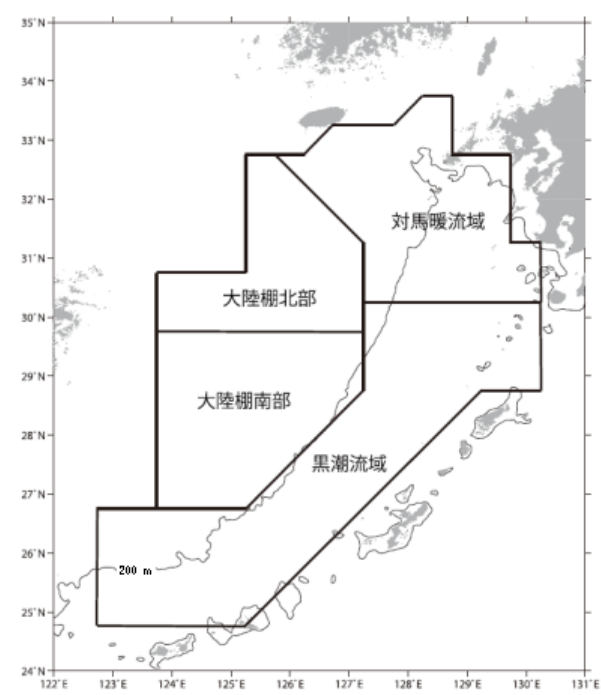


図2. 海況（沖合）

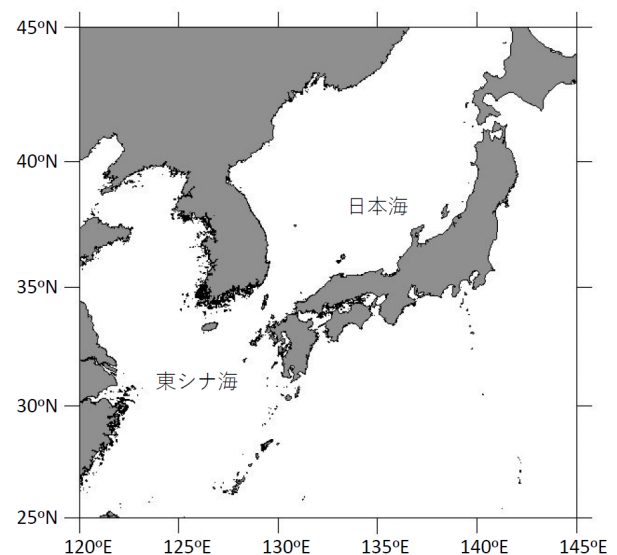


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、11月と2・3月に「平均的な位置（屋久島南付近での変動）」もしくは「離岸傾向」となるが、12・1月は「平均的な位置」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚、黒潮流域では「やや高め～かなり高め」で経過する。

2. 経過（2026年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月～6月「かなり高め」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「やや高め」。

南部：4月～6月「やや高め」、7月～9月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4月～7月は「平均的な位置（屋久島南付近での変動）」、8・9月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8・9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「はなはだ高め」、7・8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」、10月「かなり高め」。

山口県沿岸：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9月「はなはだ高め」、10月「かなり高め」。

対馬東水道：4月「かなり高め」、5月「やや高め」、6月「はなはだ高め」、7月「やや高め」、8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」、10月「やや高め」。

壱岐水道：4月～6月「はなはだ高め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「はなはだ高め」、10月「やや高め」。

五島西沖：4・6月「かなり高め」、8月「平年並み」。

五島灘：4・6月「かなり高め」、8・10月「やや高め」。

天草西沖：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」、10月「やや高め」。

西薩・甑沖：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沖合：4月「やや高め」、5月「やや低め」、8月「はなはだ高め」。

沖縄島南東：4月「平年並み」、6月「かなり低め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、10月「かなり高め」。

沖縄島南西：4月「平年並み」、6・7月「かなり低め」、8・10月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4・5月「平年並み」、6・7月「やや高め」、8月「かなり高め」、9・10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや低め」、5月～8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4月～8月「平年並み」、9・10月「やや低め」。

壱岐水道：4月「やや低め」、5月～10月「平年並み」。

五島西沖：4・6・8月「平年並み」。

五島灘：4・6・8・10月「平年並み」。

天草西沖 : 4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、8・10月「平年並み」。
西薩・甕沖 : 4・5・8月「平年並み」。
薩南沿岸 : 4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。
薩南沖合 : 4・5月「やや低め」、8月「平年並み」。
沖縄島南東 : 4・6月「平年並み」、7・8月「やや高め」、9月「かなり低め」。
沖縄島南西 : 4・6・7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「はなはだ低め」。

3. 現況（2026年10月中旬）

1. 大陸棚上

海面水温は北部「かなり高め」、南部「やや高め」。

2. 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「やや高め」。

3. 対馬暖流域

海面水温は「やや高め」。

（注）引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで、平年を下回る。沿岸域は前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：16～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、10～16cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980年代から1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2006年以降は大きな増減はないものの、2016年以降は緩やかな減少傾向にあり、2025年の資源量は30万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回り、2025年は6万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2026年4月～8月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中・南部、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1万2千トンで前年（2025年4月～8月、1万6千トン）、平年（過去5年の平均値、1万6千トン）を下回った。鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は15～24cmの1歳魚であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで平年を下回った（表2）。漁獲の主体は20cm以上の2歳魚、12～20cmの1歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2024年級群の豊度は2023年級群を上回り、2025年級群の豊度は2024年級群並みか下回ると考えられる。2026年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、新規加入量調査などから判断すると2025年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。各年級の豊度から全体の来遊量としては前年並みとみられる。沖合域の来遊量は前年並みで、平年を下回る。沿岸域では直近の漁況より、漁獲の主体となる1歳魚の来遊量は前年を下回るとみられることから、前年・平年を下回ると考えられる。

(2) 日本海

近年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）の全体に占める割合が低く、1歳魚以上（小銘柄以上）が主体となる。1歳魚以上の年級豊度は前年並みとみられることから、来遊量は前年・平年並みと考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで平年を上回り、沿岸域は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）に加えて、32cm以上の2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲される。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、60万トン前後に留まっている。近年は、2013年に46万トンまで減少したが、2014年以降、高い加入量に支えられて資源量は増加し、2024年の資源量は91万トンと推定されている（なお、2025年の資源量を推定する2026年度資源評価は、2026年12月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降8万～10万トンの水準であり、2025年は14万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2026年4月～8月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部、五島西と対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2.1万トンで前年（2.0万トン）並みで、平年（1.2万トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年並みで、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回り、平年並みであった（表1）。漁獲の主体は26～40cmの1歳魚以上で、4月以降は25cm以下の0歳魚がそれに加わった。

なお、一部の期間、長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回り、平年並みであった（表2）。漁獲の主体は26～42cmの1歳魚以上で、7月以降は25cm以下の0歳魚が加わった。ただし、主要港の一部では、陸上の処理能力などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群を上回り、2025年級群の豊度は2024年級群並みとみられる。2026年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況から判断して、2025年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みとみられる。沖合域は前年並みで平年を上回り、沿岸域は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）に加えて、2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲の対象となる。各年級の豊度から全体としては前年並みから上回るとみられ、11月～3月期の来遊量は好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで平年を下回り、沿岸域は前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、五島灘・薩南、対馬沖が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～40cmの0歳魚以上（豆銘柄以上）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移していたが、2018年の22万トンから2019年に11万トンに急減した。2021年から再び増加し、2022年は19.2万トンとなったが、再び減少に転じ、2024年は10.7万トンと推定された（なお、2025年の資源量を推定する2026年度資源評価は、2026年12月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移していた。近年では2011年の5万トンをピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2020年は2万トンまで減少した。その後増加し、2025年は3万トンであった。

2. 漁況の経過

2026年4月～8月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と五島灘・薩南であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2.1万トンで前年（2.0万トン）並みで、平年（1.2万トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年・平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は25cm以下の0歳魚と28～40cmの1歳魚以上であった。

なお、一部の期間、長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群を下回り、2025年級群の豊度は2024年級群並みとみられる。2026年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況などから判断して、2025年級群並みとみられる。

例年、沖合域では11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲量の大半を占める0歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。沿岸域では0歳魚以上（豆銘柄以上）が漁獲の主体となる。沿岸域の来遊量は2026年6月以降の漁況から判断して、前年・平年を下回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）主体に、18～23cmの1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部、後半に日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）に加えて、18～23cmの1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じ、2025年の資源量は210万トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年は100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2010年代には横ばい傾向にあったが、2019年以後急激に増加して2025年は14万9千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2026年4月～8月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。海域別に見ると、鹿児島・熊本・長崎県では前年・平年を上回り、山口県では前年並みで、平年を上回った（表1）。漁獲の主体は、漁期前半は15～22cmの1～3歳魚と15cm以下の0歳魚、後半は15cm以下の0歳魚であった。

(2) 日本海

2026年4月～8月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。海域別に見ると、石川県～山形県までの日本海北部では前年・平年を上回り、日本海西部でも、漁獲の大半を占める鳥取県では前年並みで平年を上回った。なお、日本海西部では一部の期間、水揚げの規制があった。漁獲の主体は、

前半は15～22cmの1～3歳魚と10cm以下の0歳魚、後半は10cm以下の0歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2025年級群の豊度は高かった2024年級群よりも低く、2024年級群の豊度は2023年級群よりも高く、2023年級群の豊度は2022年級群よりも高いとみられる。2026年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況から判断すると、2025年級群並みかそれよりも高いとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に来遊する1～3歳魚の来遊量が漁況に大きな影響を与えている。漁獲の主体となる1～3歳魚（2023～2025年級群）の豊度が前年並みと考えられることから、東シナ海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に来遊する1～3歳魚の来遊量が漁況に大きな影響を与えている。漁獲の主体となる1～3歳魚（2023～2025年級群）の豊度が前年並みと考えられることから、日本海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は、1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年には2万5千トンとなった。2004年以降は増加傾向を示し、2015年には14万トンに達した。その後は減少して2020年には6万3千トンとなったが、2021年以降は再び増加に転じ、2023年には13万6千トンとなった。2025年の資源量は11万2千トンと推定されている。

東シナ海・日本海における我が国のウルメイワシ漁獲量は、1976年から1998年にかけては毎年2万トンを超えていた。特に1980年代後半から1990年代前半には、4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半以降は減少傾向となり、2000年には1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向を示し、2013年および2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年～2019年の漁獲量は3万1千～3万9千トンの範囲で変動し、2020年には1万9千トンと大きく減少した。2021年以降は再び増加し、2023年には過去最高の6万1千トンを記録したが、2025年は3万6千トンとなった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は漁期を通して5～15cmの0歳魚および15～25cmの1・2歳魚であった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2026年4月～8月の漁況の経過、卵稚仔調査の産卵量推定値および資源評価結果から判断すると、2025年級群の豊度は高かった2024年級群を下回ると考えられる。2026年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況や中層トロール調査の結果などから判断すると、2025年級群並みか下回る可能性があると考えられる。したがって、東シナ海における来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年11月～2027年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））・1歳魚（2025年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2025年11月～2026年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2026年4月～8月）および見通し（2026年11月～2027年3月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1977年以降、2019年まで増減を繰り返しながら11万3千トン～42万6千トンで推移した。2020年以降は減少傾向にあったが、2024年に急減した後、2025年はさらに減少し、2万2千トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンとなった。2016年以降は減少傾向にあり、2024年に急減した後、2025年は過去最低を更新し8千トンまで減少した。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は前年・平年を大きく下回った（表1）。漁獲の主体は4月～6月に10～12cmの1歳魚、7月～8月には8～15cmの0・1歳魚となった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となり、1歳魚（大羽銘柄）が混じる。卵稚仔調査の産卵量推定値や直近の漁況などから判断すると、2026年級の春季発生群の豊度は2025年級群を下回ると考えられる。2026年級の秋季発生群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の不漁を考慮すれば、2025年級群並みもしくは下回ると考えられる。漁獲の主体となる2026年級の豊度が前年並みもしくは下回ることから、東シナ海における来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2026年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は1,094トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比53%、平年比81%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は134トンで、前年・平年を下回った（前年比33%、平年比41%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は2,617トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比85%、平年比77%）。
熊本 牛深港	漁獲量は23トンで、前年・平年を下回った（前年比73%、平年比39%）。	漁獲量は255トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比86%、平年比37%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は2,078トンで、前年・平年を下回った（前年比53%、平年比46%）。	TAC管理のための操業調整が行われ、中型まき網による漁獲量は6,407トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比73%、平年比108%）。	
佐賀	漁獲量は20トンで、前年・平年を下回った（前年比45%、平年比21%）。	漁獲量は17トンで、前年・平年を下回った（前年比27%、平年比63%）。	
福岡	中型まき網による漁獲量は142トンで、前年・平年を下回った（前年比75%、平年比43%）。漁獲のうち、中銘柄が42%、大銘柄が29%であった。小型定置網の漁獲量は1トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比207%、平年比24%）。	中型まき網による漁獲量は561トンで、前年・平年を下回った（前年比68%、平年比73%）。漁獲のうち、マメ銘柄が96%を占めた。	中型まき網による漁獲量は295トンで、前年・平年を上回った（前年比9,289%、平年比3,415%）。
山口	中型まき網による漁獲量は561トンで、前年・平年を下回った（前年比79%、平年比56%）。	中型まき網による漁獲量は2,065トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比120%、平年比142%）。	

注：「前年」は2025年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は10,014トンで、前年・平年を上回った(前年比290%、平年比448%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は2,114トンで、前年・平年を上回った(前年比613%、平年比1,002%)。	主要4港のまき網による漁獲量は2,034トンで、前年・平年を上回った(前年比170%、平年比239%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は94トンで、前年・平年を下回った(前年比37%、平年比22%)。	主要4港のまき網による漁獲量は0.5トンで、前年・平年を下回った(前年比1.3%、平年比0.1%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は16トンで、前年・平年を下回った(前年比21%、平年比11%)。
熊本 牛深港	漁獲量は4,734トンで、前年・平年を上回った(前年比168%、平年比281%)。	漁獲量は210トンで、前年・平年を下回った(前年比50%、平年比30%)。	漁獲量は31トンで、前年・平年を下回った(前年比14%、平年比3%)。
長崎	中型まき網による漁獲量は16,994トンで、前年・平年を上回った(前年比236%、平年比294%)。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は3,467トンで、前年・平年を下回った(前年比45%、平年比52%)。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は40トンで、前年・平年を下回った(前年比5%、平年比2%)。
佐賀	漁獲量は3.3トンで、前年・平年を上回った(前年比746%、平年比610%)。	漁獲量は0.06トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年も上回った(平年比167%)。	漁獲量は1.5トンで、前年・平年を下回った(前年比73%、平年比57%)。
福岡	中型まき網による漁獲量は31トンで、前年・平年を下回った(前年比22%、平年比57%)。	中型まき網による漁獲量は19トンで、前年・平年を下回った(前年比57%、平年比28%)。	中型まき網での漁獲はなかった。
山口	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は1,462トンで、前年・平年を上回った(前年比122%、平年比222%)。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲は29トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比98%、平年比145%)。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲はなかった。

注：「前年」は2025年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

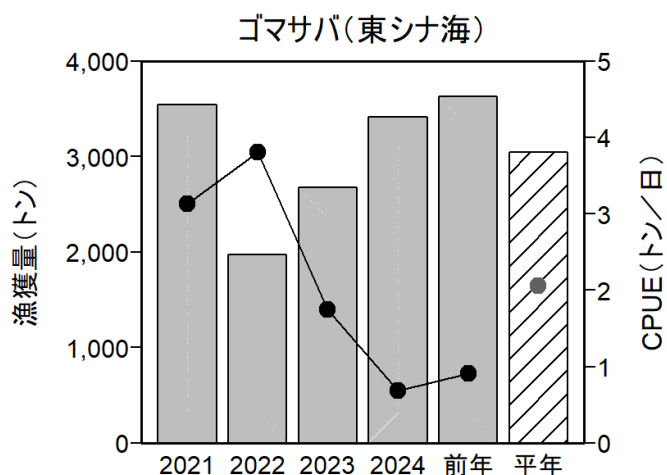
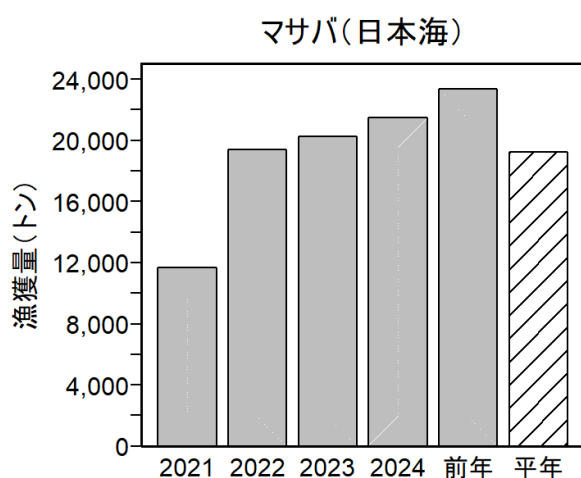
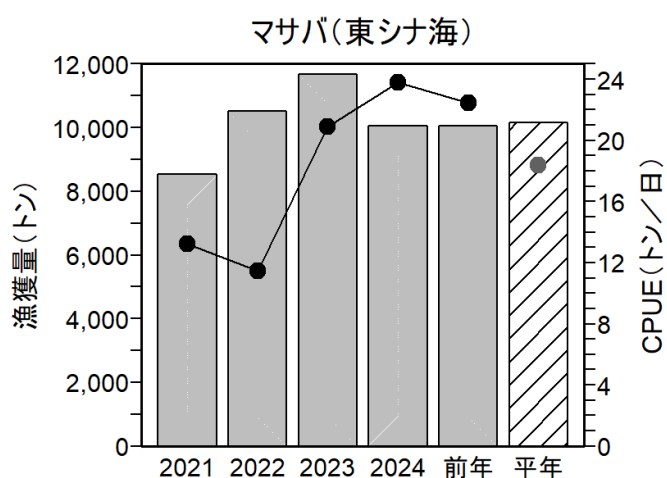
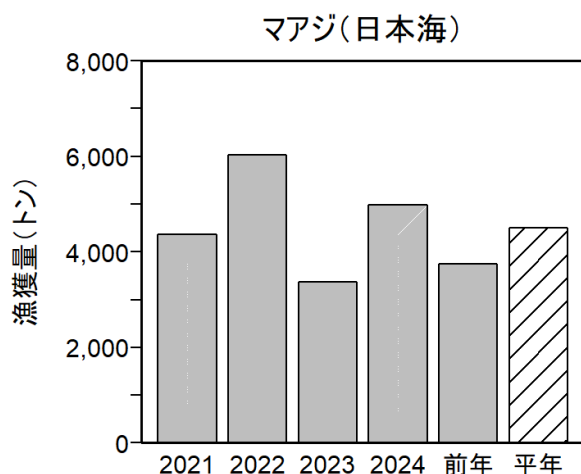
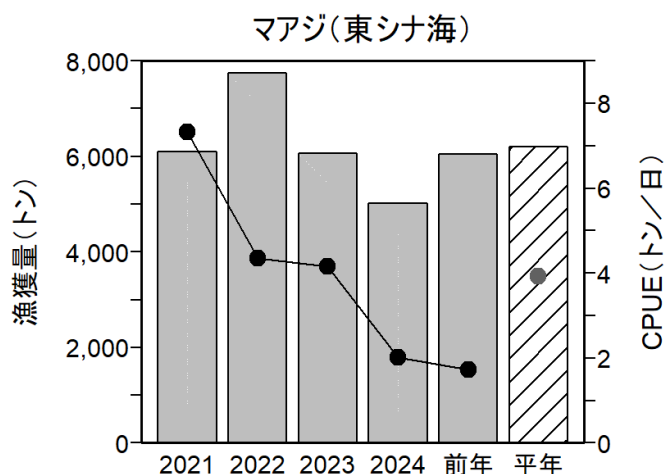
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2026年4月～8月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は361トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比178%、平年比85%)。	漁獲量は769トンで、前年・平年並みであった(前年比114%、平年比117%)。	漁獲量は9トンで、前年・平年を下回った(前年比9%、平年比20%)。
鳥取	漁獲量は2,054トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比135%、平年比62%)。	漁獲量は17,530トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比82%、平年比124%)。	漁獲量は29,906トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比113%、平年比144%)。
兵庫	漁獲量は62トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比125%、平年比101%)。	漁獲量は15トンで、前年・平年を下回った(前年比25%、平年比72%)。	漁獲量は1.2トンで、前年・平年を下回った(前年比11%、平年比4%)。
京都	漁獲量は180トンで、前年・平年を下回った(前年比74%、平年比74%)。	漁獲量は619トンで、前年を下回り、平年を上回った(前年比55%、平年比129%)。	漁獲量は585トンで、前年・平年を上回った(前年比268%、平年比322%)。
福井	漁獲量は133トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比137%、平年比58%)。	漁獲量は452トンで、前年を下回り、平年並みであった(前年比46%、平年比94%)。	漁獲量は5トンで、前年・平年を下回った(前年比23%、平年比17%)。
石川	漁獲量は600トンで、前年・平年並みであった(前年比111%、平年比89%)。	漁獲量は2,685トンで、前年・平年を下回った(前年比33%、平年比65%)。	漁獲量は18,767トンで、前年・平年を上回った(前年比240%、平年比369%)。
富山	漁獲量は112トンで、前年・平年を下回った(前年比63%、平年比39%)。	漁獲量は328トンで、前年・平年を下回った(前年比15%、平年比30%)。	漁獲量は4,512トンで、前年・平年を上回った(前年比297%、平年比612%)。
新潟	漁獲量は137トンで、前年・平年を下回った(前年比59%、平年比44%)。	漁獲量は839トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比119%、平年比331%)。	漁獲量は338トンで、前年・平年を上回った(前年比204%、平年比564%)。
山形	漁獲量は42トンで、前年・平年を下回った(前年比64%、平年比62%)。	漁獲量は22トンで、前年・平年を上回った(前年比187%、平年比276%)。	漁獲量は63トンで、前年・平年を上回った(前年比1,292%、平年比2,115%)。
秋田	漁獲量は117トンで、前年・平年を下回った(前年比58%、平年比43%)。	漁獲量は119トンで、前年・平年を下回った(前年比37%、平年比39%)。	漁獲量は170トンで、前年・平年を上回った(前年比5,774%、平年比415%)。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は68トンで、前年・平年を上回った(前年比151%、平年比124%)。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は278トンで、前年・平年を上回った(前年比236%、平年比129%)。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は448トンで、前年・平年を下回った(前年比32%、平年比33%)。

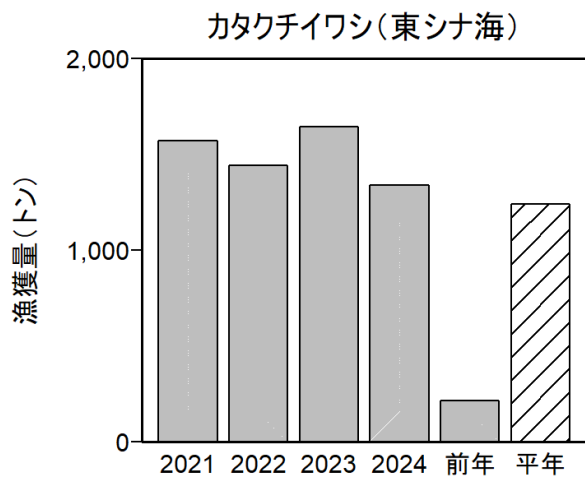
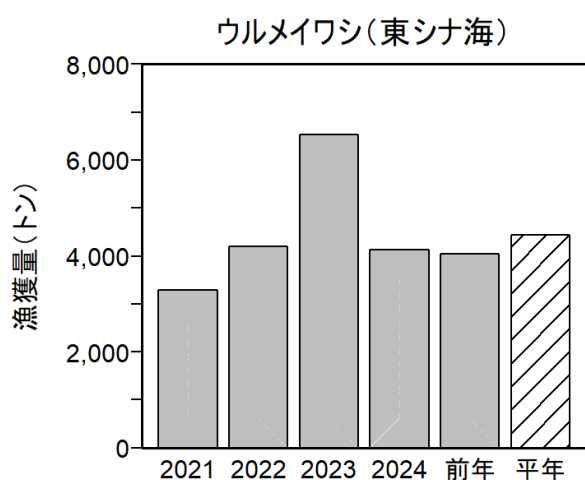
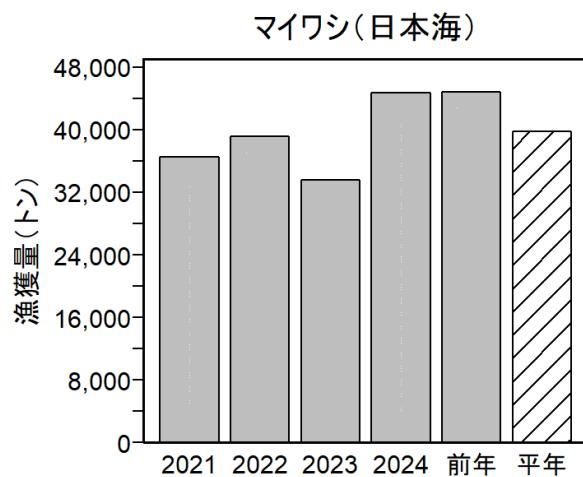
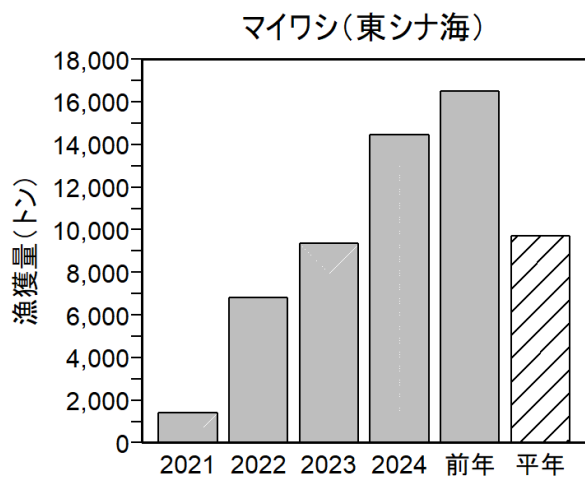
注：「前年」は2025年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図(マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ;棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ;折れ線グラフ、CPUE)。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県(枕崎港・阿久根港)のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量(ゴマサバを含むが主にマサバ)の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県(枕崎港・阿久根港)のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産技術振興センター	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所